熊本大学教育学部紀要
第64号, 85－92, 2015

ブーバーの哲学的人間学における「距離」と「関係」

―― 人間存在の原理の二重性の再吟味 ――

今　井　伸　和

“Distance” and “Relation” in Buber’s Philosophical Anthropology:

A Re-examination of the Twofold Principle of Human Existence

Nobukazu Imai

（Received October 1, 2015）

はじめに

そもそも人間とは何であろうか．人間は他の動物と本質的にどこがどう違うのか．それとも，そんなには違わないのか．

この問題に，マルティン・ブーバー（Martin Buber, 1878-1965）が挑んでいる．彼の哲学的人間学に関する論文「原初的距離と関係」（“Urdistanz und Beziehung,” 1950）で提起された概念「距離」と「関係」は，動物から人間存在を分離させ，人間存在の特異性を際立たせるような原理である．

それにしても，なぜブーバーを取り上げるのか，説明が必要であろう――哲学的人間学の代表者はシェーラーやプレスナー，ゲーレン等であるというのに．その理由は，「距離」と「関係」という人間存在の二重の原理が，現代の動物学の科学的知見と通底していることが，最近になってわかってきたからである．

したがって，本稿では，現代の科学的知見とブーバーの哲学的人間学とをつき合わせることによって，ブーバーの哲学的人間学に科学的・客観的な根拠が与えられることを明らかにしたい．またそうすることで，最新の科学的知見において明らかにされたことの哲学的な意味も同時に与えられる．本稿のねらいは，まさにそこ――哲学的洞察と科学的客観性との対照――にあるのである．

科学的・客観的な事実は，たしかに虚構に基づかず事実に即しているという意味で，ノン・フィクションである．ところが，かえって真実から遠ざかる場合が多々ある．とくに人間とは何かという問題を考える場合に，科学的な説明による人間観に何かもの足りなさを感じることがある．たとえば，人間は「裸のサル」に過ぎないと言われると，人間とは何かを根本的に語る上で，大切なものが幾分か等閑にされているように感じる．それよりは，人間とは考える葦であると言われるほうが，何かしらの真実を捉えているように思われるが，同時にエビデンスという点で疑念も残る．人間とは何かという問題を考察する場合，科学的な事実がその深みに達するためには，哲学的な思索が必要であり，哲学的な思索がその独断に陥らないためには，科学的な知見が必要である．要するに，哲学的な思索と科学的な見地の相補性が重要なのである．

次のような順序で論述していきたい．第一に，人間存在の二重の原理とされる「距離」と「関係」について，ブーバーに即して考察する．第二に，彼によれば「距離」は赤ちゃんのときから人間に見られるものだとされるが，では赤ちゃんにとって「距離」はどのような意味をもつのかという問題を現代の科学的な知見から明らかにする．第三に，「距離」によって開かれる世界において他者はどのような位置を有するのか，という問題を考察する．

1.　人間存在の原理の二重性

ブーバーは，人間存在の原理について，「人間存在の原理は単一の原理ではなく二重の原理であり，それは，二重の運動において構成されるが，もっとも一方の運動が他方の運動の前提であるという仕方で，二重なのである」と述べている[1]．そして，一方の原理が「原初的距離〔をとること〕」（die Urdistanzierung），他方の原理が「関係〔すること〕」（das In-Beziehungtreten）とされる[2]．本章では，この二重の原理について概観する．

(1)「原初的距離」とは何か

「原初的距離」とは何であろうか．まず「原初的」の意味を押さえておきたい．「原初的」と訳した原語は，ur- という接頭辞である．一般に誤解されやすいのだが，「原初的」とは，人間がその発達の初期には，つまり赤ちゃんの時期には，世界と自他一如的な融合関係の中にあるが，次第にその関係から距離をとって，自分と他者とを分離して認識できるようになる，ということではない[3]．一見わかりやすい解釈だが，なぜ間違いなのであろう．

第一に，ur- という接頭辞が意味するのは，発達というような経験的な事実ではない，ということが言える．それは二重の原理のうちのひとつであり，ラテン語の principium が原初を意味していることを考慮すると，ur- も時間的なそれではなく，人間存在をアプリオリに規定する「始原」・「原初」を意味する[4]．第二に――こちらのほうがより重要なのだが――，ブーバー自身が述べているように，赤ちゃんは，生まれたての最初の日からすでに，距離という事実のもとにあるからである[5]．それもそのはず，「原初的距離」はあくまでも人間存在が動物から分離区別される原理であるのだから，徐々に赤ちゃんが世界から距離を取れるようになるとするならば，赤ちゃんが最初は距離が取れてないということになり，そうなると，赤ちゃんは生まれた当初は人間ではない，ということになってしまう．上述の理由で，赤ちゃんが世界との融合関係から徐々に距離をアポステリオリにとっていくという解釈は誤りなのである．

とはいえ，赤ちゃんが生まれた最初の日から世界に対して距離をとっているとは，具体的にはどういうことなのか．この問題に関しては，次章で現代の比較認知科学との連関で取り上げたい．

ともかく，ブーバーが「原初的距離」という概念で述べたかったのは，くり返して言うが，先に述べたような発達の事実ではない．それは人間存在が動物から区別される根拠なのである．言い換えると，人間内部の発達の過程において「原初的距離」が出現したのではなく，人間が動物から分かたれる過程において「原初的距離」という機制がはたらくのである．

周知のように，ユクスキュルの生物学はシェーラーを含む種々の哲学的人間学に影響を与えたが，ブーバーもユクスキュルの業績を参照しつつ，「原初的距離」に言及している[6]．すなわち，動物の環境世界は，その動物の生命衝動に依存し，それと密着しているのに対して，人間においてはじめて，存在者がその人間から押し離され，存在者がそれ自身において承認される[7]．そのことを可能にしているのが「原初的距離」という機制なのである．

そうすると，「原初的距離」の意味とはこうである．すなわち，自分の衝動に距離を置くことによって，自分の周囲にいる存在連関が自分から押し離され，存在者がそれ自身において認知されるという意味である[8]．問題は，「それ自身において認知される存在者」とは何か，ということである．それをブーバーは，「自立的な向こう側」と呼んでいる[9]．「自立的な向こう側」については，第 3 章で他者問題との連関で言及したい．

(2)「関係」とは何か

次に，人間存在の第二の原理，「関係」についてはどうか．先述の「原初的距離」は，「関係」の前提だとされる．その理由として，ブーバーは，両者の連関について，いささか独断的に，「距離をとった存在者とのみ，より正確に言えば，自立的な向こう側とのみ，関係することができるからである[10]」と述べている．この独断は正しいのだろうか．

常識的に言うと，たとえば「近しい」間柄と言うように，相手との心理的な距離がきわめて少ないことや相手と物理的に密着していることが，その関係の親密さを表すのではないか．むしろ相手との距離がないことが関係の前提であるとも言える．この常識に逆らって，ブーバーは「距離」が「関係」にとってなくてはならない前提だと言っている．これをどう考えるか．

単純に考えて，関係するには，異質な者とよりも同質性を有する他者とのほうが簡単であろう．いわゆる気心が通じる間柄は，異質な者との間では難しい。しかし，同質な他者とは，いったい何であろうか．それは，厳密に言って，語義矛盾である．むしろ，異質であるからこそ，すなわちそれぞれが別の言語ゲームのもとにあり，相互にわかり合えず，両者の間に無限の距離があり，その距離が克服不可能であるからこそ，他者は他者たりえている，と考えるべきである．

ブーバーが「関係」とは「他者性の受容」だと述べている場合も，その「他者性」とは無限なる異質性だと理解されねばなるまい．「真の対話，すなわち関係が現実に実現することとは，他者性を受容することである．[11]」われわれは他者をときとして利用しようとしたり支配しようとしたりする．その際に，他者性は受容されずに無化されている．他者性の受容において重要なのは，他者を，「ほかならぬこの人間存在として，今このような実情にある者として，無条件に受け入れ，承認しているかどうか」

である[12]．逆に言えば，利用したり支配したりすることが可能なのは，他者の一部分の属性を利用し支配しているのである．しかし，それは同時に他者の異質性を排除することである．なぜなら，その際自分の観点に照らして他者を差配しており，他者の異質性はすでに損なわれているからである．また，他者を完全に支配しようとして，その他者を傷つけたり殺してしまっては，その他者性を無化することになる．だから，他者性をまるごと利用・支配することは不可能である．われわれは，利用したり支配したりするのとは別の仕方で他者に関わろうとするには，その他者の他者性を受容するしかない．そういうわけで，「関係」とは，他者の他者性のまるごとの受容だとされるのだ[13]．

ところで，ブーバーは，人間が，人間として，他者である人間を離隔し，その人間と関わりうる，この事態を Mensch-mit-Mensch-sein と表現している[14]．Mensch-mit-Mensch-sein は，訳出すると，「人間が人間と関わって存在していること」である．つまり，人間は，他者である人間との関係なくしては存在しえないような存在であり，原初的に社会的な存在なのである．では，われわれは，このことを深い意味において具体的にどのように理解すればいいのか．

ブーバーによれば，この Mensch-mit-Mensch-sein の特徴を最も表すものは，言葉にほかならない，とされ，その言葉の最も原初的な形態は，固有名詞であったと言うべきである．

> 「固有名詞」は，援助者が離れたところにいる場合に，その援助者に対して，まさにいまがどうしても助けが必要なのだと知らせるものであった[15]．

それ以上にはブーバーは詳しく述べていないが，それにしても，どうして「固有名詞」なのか．一般名詞だといけないのか．どうしても助けが必要で他者を呼ぶときとは，どういうときかを考えてみればよい．それは，次章での考察を先取りして言えば，赤ちゃんが，自分の世話をしてくれる，自分にとって固有の，かけがえのない人間存在（たとえばお母さんやお父さん等）を呼ぶときであるから，「固有名詞」なのである．そしてまた，その原初的な形態は赤ちゃんの泣き声（たとえば夜泣き）であったと言うべきである．

以上，本章で見てきたように，ブーバーによれば人間存在の原理は二重であり，その一つは「原初的距離」であり，もう一つは「関係」である．また、前者は後者の前提だとされる．ブーバーは，この「距離」と「関係」について，言わば哲学的な洞察から述べているように思われる．言い換えれば，この二つの概念は実証的に導き出されたものではない．では，「距離」と「関係」を現代の科学的な知見と対比させた場合，それは説得力をもちうるであろうか．そこで，次章で参照するのが，京都大学霊長類研究所におけるチンパンジーの研究である．

2．現代の科学的知見

(1) 京都大学霊長類研究所が明らかにしたこと

本章では，前章で見たブーバーの洞察を現代の科学的知見によって裏付けてみよう．ブーバーは，哲学的な思索によって「原初的距離」と「関係」という二重の原理を案出した．しかしそれは言わば仮説であり，ブーバー自身がそれを客観的に科学的な見地から証明したわけではなく，そこにもの足りなさが残らないでもない．客観的な事実の観察からブーバーの仮説を定説にできないだろうか．

驚くべきことに，1950 年に述べられたブーバーの「距離」および「関係」という人間存在の二重の原理は，その約半世紀後に発見される現代の科学的な見地と合致している．その科学的な見地とは，京都大学霊長類研究所の松沢哲郎たちの研究グループによる，比較認知科学におけるチンパンジーの研究である．

問題は，人間と動物とを根本的に区別するものは何か，というものであった．それは，環境世界の繋縛性から人間を解き放つ精神（シェーラー）であるだろうか．あるいは自我の離心性（プレスナー）であろうか．動物との比較において致命的に見劣りする人間の欠如（ゲーレン）であろうか．

松沢たちの研究グループが発見した，人間と動物とを分かつものは何だったのであろうか．それは，精神とかいった，高邁だが，やや独断的な原理などではない．むしろ，当たり前すぎて見過ごされてきたコロンブスの卵のようなものと言うべきかもしれない．

松沢は比較認知科学の研究者であり，進化的に人間に最も近いチンパンジーを研究対象にして，チンパンジーと人間との異同を研究し，人間の心の進化的な基盤を探求している．チンパンジーは最も人間に近いと述べたが，人間とチンパンジーの全遺伝子情報を比較した結果，ＤＮＡの塩基の並び方は 1.2％の違いしかなかった．つまり遺伝子の配列が人間とチンパンジーとでは 98.8％同じであるらしい．また，人間と同じように，チンパンジーも道具を用い，あ

る種の社会をもち，子育てをする．ではいったい，チンパンジーと人間とでは，どこがどう違っているのだろうか．むしろ両者を区別する決定的な相違はないのだろうか．

松沢の研究グループが発見したことは何か．それは何と，人間の赤ちゃんが仰向けに寝て安定していられること，であったのだ[16]．逆に言うと，仰向け寝以外には，人間とチンパンジーはそれほど違わない――しかし，この仰向け寝が決定的なのだ．

チンパンジーの赤ちゃんを仰向けに寝かせることはできない．無理やり寝かせようとすると，どうなるのか．チンパンジーの赤ちゃんは，仰向けに寝かせられると，まず右手と左足が上がり，しばらくすると逆に左手と右足が上がる，という[17]．オランウータンにも同様の実験を行い，結果は同じであった．

いったいチンパンジーは何をしているのであろうか．松沢によれば，「何かつかまるものはないか」ともがいている，のである[18]．

> チンパンジーの赤ちゃんは生後の三ヶ月，ずっとお母さんにつかまっていて，一日二四時間ほとんど離れない．そういう時期に，無理やりお母さんから離してテストしてみると，生後二ヶ月まではもがいているだけ．何かつかまるものはないかと，もがく．そして二ヶ月ぐらいになると，もがいている状態からパタッとうつ伏せになる．つまり「寝返り」ができるようになる．寝返って，うつ伏せになったほうが，とにかくお腹に何かが接触して，しがみついている状況に近い．多少は落ち着くようだ[19]．

チンパンジーの赤ちゃんが仰向けに寝られないのは，赤ちゃんとお母さんが分離不可能の状態，距離が取れず密着している状態にあるからである．距離がとれずに密着していることには，主に二つの利点があるという．第一に，チンパンジーの赤ちゃんはしがみつくことによって，いつでもすぐにお乳が吸える．第二に，重要な臓器がつまっている腹部を敵に曝すことなく守っているのである[20]．

しかし，人間の赤ちゃんのみが，不思議なことに，距離をとることができる．ブーバーで言えば，まさに原初的な距離をとる．人間に限らず哺乳類は他者であるお母さんが必要である．また，きわめてひ弱なため周囲の他者から守られていなければならない．そのためにもお母さんと密着しているほうが自然である．しかし，人間の赤ちゃんだけが不自然にも他者から敢えて距離をとるのである．

(2) 人間の進化

くり返せば，松沢は，人間を動物から進化させたものは，仰向け寝の姿勢だと考えている．では，仰向け寝は，人間にどのような変化をもたらすのだろうか．決定的な変化は，第一に見つめ合うこと，微笑むことの飛躍的な増大であり，第二に声でやりとりをするようになったことである[21]．

マカクの親子は見つめ合わない．ニホンザルの子は母親の胸にぴったりとくっついて，その間に距離はなく，見つめ合うことができないのだ．ホミノイド（人間と大型類人猿を合わせたもの）だけが見つめ合う．チンパンジーはいわゆる「高い，高い」をしたりもする[22]．

しかし，チンパンジーの見つめ合いの頻度は，人間と比べて，きわめて限定的である．人間ほどには，チンパンジーは見つめ合わない．「この見つめ合いは，チンパンジーもする．あらためてこんなことを言うのは，人間だけだと思われていたのに，実はチンパンジーもすることがわかったからだ．ニホンザルに見つめ合いはできない．赤ちゃんは胸にしがみついているので目が合わない．[23]」このように松沢が述べていることで明白なのは，チンパンジーの見つめ合いが，あらためて発見されるほどに，頻繁でなかった，ということである．見つめ合うためには，他者との距離が必要である．その距離が，人間の場合にだけ，仰向けに寝ることによって可能になったのである．

第二の，声でやりとりをするという点については，どうか．たとえば，夜泣きをするのは人間だけらしい[24]．チンパンジーは，夜泣きをしない．チンパンジーの赤ちゃんは，お母さんのすぐそばにいるから，お腹がすいて母乳がほしくなれば，自分でお母さんの乳首を探しだして吸えばいい．だから，夜泣きをする必要がない．人間の赤ちゃんだけが，母親と物理的に離れているので，声を上げて泣かざるをえない．お母さんも，「○○ちゃん，ちょっと待ってね．すぐ行くからね」と声をかける．赤ちゃんのこの泣き声が次第に言葉へと変わるわけだ．

ところで，人間とは何かと問う場合，巷に流布している言説がある．それは，人間は直立二足歩行するサルだとする定義である．この定義によれば，四足で歩いている動物がいて，それが立ち上がり，手が自由になったので，いろいろな物を扱えるようになって道具を使い始め，それが脳を発達させて，人間らしい知性が生まれた，ともっともらしく言われる．たとえば，宗教哲学者の上田閑照は次のように述べている．「今更言うまでもないことですが，直立によって人間には，生物にとっての自然環境を越

え出て，『世界』が開かれ，そして，直立によって自由になった手を使って自然環境を加工し，或いはそこから材料を取ってきて，『世界』を『人間の世界』として構築してきました．[25]」もっとも上田は，そのような人間の在り方を批判的に述べているのだが，それでも，直立二足歩行こそが生物に対する人間の動かせない基礎的事態であると見なしている．これは本当なのだろうか．

松沢は，直立二足歩行説が間違いであると指摘している[26]．松沢によれば，ニホンザルも手で大豆や麦を器用につまむ．そもそも霊長類は四足動物ではなく，「四手類」である，と．そうすると，人間は立ち上がることによって手をつくったのではない．実は，人間は，立ち上がることによって，足をつくったということである．つまり，足という物をつかめない四肢の末端をつくったのである．巷に流布した言説や上田の哲学的な洞察は，現代の科学的見地によって，その説得力の弱さが浮き彫りになる．

松沢による人間の定義は，親子が離れ，子が仰向けで安定していられる，これである．「哺乳類の中でも霊長類だけが子が母親にしがみつき，霊長類の中でもニホンザル・チンパンジー・ヒトといった真猿類だけが母親が子を抱き，真猿類の中でもホミノイドだけが互いに見つめ合い，ホミノイドの中でも人間だけが親子が離れて仰向けで安定していられる．[27]」

前章で，人間存在の原理の一つは「原初的距離」であり，もう一つは「関係」であることを見た．また，前者は後者の前提であるとされた．このブーバーの哲学的な洞察は，松沢らの研究グループの成果によって実証的に確認することができる．松沢によれば，人間とチンパンジーの決定的な差異は，「仰向け寝」をすることによって他者から距離をとることである．第二に，他者から距離をとることによって見つめ合いや呼びかけが可能となり，ひいては他者と関係することが可能となるのである．このように，現代の実証的な研究によって，ブーバーの言う「原初的距離」と「関係」は裏付けられる．赤ちゃんのときから「原初的距離」が見られるとブーバーが語ったことをここであらためて想起しておこう．

3．自立的な向こう側とは

本章では，ブーバーの思想に立ち返って，「自立的な向こう側」（selbständiges Gegenüber）という概念について見ていこう．

第 1 章で見たように，人間が自分の衝動に距離を置くことによって，自分の周囲にいる存在連関が自分から押し離され，存在者がそれ自身において認知される．それが「自立的な向こう側」と呼ばれるものであった．そうすると，「自立的な向こう側」とは，言い換えれば，他者のことであるであろう．

ブーバーの哲学的人間学であれ，松沢による比較認知科学であれ，他者問題が人間とは何かを考える上での鍵になる．そういうわけで，「自立的な向こう側」を考察することによって，最終的には他者とは何かという問題を明らかにしたい．

(1) 自立的な向こう側とは他者のことである

「自立的な向こう側」が出来するとは，どういう事態であるのか．「原初的距離」によって可能となる「自立的な向こう側」とは何か．

まず，「自立的」（selbständig）という形容詞の意味であるが，それは，こちら側に存在する者にとってそれ自身独立して存立しているもの，ということである．人間以外の動物にとって，そのような，それ自身独立して存立しているものは，ありえない．なぜなら，動物にとってその領域とは，動物の生命を駆動する機構（環境世界）に密着しているからである．既に述べたように，人間のみが欲求とか必要とかいった生命機構から距離をとることができ，動物のようには環境世界に密接に結びついた領域とは異なる領域，すなわちそれ自身独立して存立している領域が可能となるのである．したがって，人間以外の動物にとって，おのれから自立して存在しているものはありえないという意味において，他者の存在はありえないことになる（そしてまた世界もありえない）．

それでは，「自立的」という形容詞で修飾される「向こう側」とは何か．「向こう側」の原語は，Gegenüber である．これは，もともと「向こう側に」という意味の前置詞（もともとは副詞），gegenüber が名詞化したものである．さらに，gegenüber は，gegen と über という二つの前置詞・副詞に分解できる．まず gegen の主な意味は，「向かって」と「逆らって」である．次に，über には主に「向こう側で」という意味と「越えてさらに先まで」という意味がある．

そうだとすると，自分の向こう側に自分とはまったく異なる存在が自立的に屹立していること，さらに，その存在の異質性が自分に向けられてはいるが，その異質性は決して内在化することができないことを「自立的な向こう側」は含意している．それは，端的に言って，厳密な意味での他者にほかならないではないか．

興味深いことに，日本語にも Gegenüber と類似した言葉がある．すなわち,「あなた（彼方)」である．たとえば,「山崎のあなたに，水無瀬といふ所に宮ありけり」(『伊勢物語』）の「あなた」や,「我がもとにあれかし．あなたももて離るべくやはとの給えば」(「蜻蛉」,『源氏物語』）の「あなた」である[28]．日本語の場合には,「あなた（彼方)」という空間的距離が, そのまま同時に,「あのお方」や「あなたさま」という他者の敬称に転用される．自己に対する相手への空間的な隔たりに，相手への敬意がこめられているからである．Gegenüber であれ，日本語の「あなた（彼方)」であれ,「原初的距離」によって自立的な向こう側ができることと，自分とは距離を隔てた、異質のかけがえのない他者が存立することとは短絡するのだ．

ここで死活的に重要なことは，人間は自分の「自立的な向こう側」として他者を打ち立てるわけであるが，その他者である人間も，こちら側を「自立的な向こう側」（すなわち他者）と見なす，ということである．ブーバーはこう言う．「人間は, 人間として, 人間を離隔し自立的にする．人間は，自分自身と同じような人間に囲まれて生きているのである.[29]」われわれは, 自分と同じような人間がまわりにもいる, と認知している．詳しく言うと，われわれは、自分とは離れて独立して存在していており, おそらくは, 向こう側もこちら側にいる自分のことを向こう側に独立して存在していると承認している人間が，まわりに存在している，と認知している．そういう意味では，自己とは，他者の他者なのである．したがって，自分と相対する他者である人間には，他者固有の世界が広がっており，自己の世界と他者の世界とを統合するようなものは何もないと言える．そうすると，自己と他者には無限の距離があると言っていいであろう．

ここで，われわれは，他者とは，その他者との距離が無限の彼方であるような存在者であるとする，レヴィナスの言う「他者」について論じることができる．奇しくも，ブーバーの「我―汝」関係の相互性が本源的ではなく，他者との無限の距離が本源的だと指摘したのは，当のレヴィナスであった[30]．しかし，ブーバーの言う「自立的な向こう側」としての他者の独立性と，レヴィナスの言う，いつもすでに逸脱してしまう他者の絶対性・無限性は，相関しているであろう．

レヴィナスは他者についてこう述べている．「私が〈他者〉について所有しうるすべての観念を,〈他者〉が絶対的にあふれ出してしまう」, と[31]．そして,「私のうちにある〈他者〉の観念を踏み越えて〈他者〉が現前する様式は，じっさい顔と呼ばれている」とされる[32]．もっとも，われわれは，ここでレヴィナスに詳細に立ち入ることはできない．しかし,「自立的な向こう側」との連関で,〈顔〉について少し言及したい．

(2)〈顔〉としての自立的な向こう側

前章で見たように，人間の赤ちゃんは，他の霊長類とは異なり，お母さんやお父さんから距離をとる（具体的には仰向けに寝る)．この距離によって，見つめ合うことと声でやりとりすることが可能になるということも見た．その際に，赤ちゃんが目にするものは何か．また，赤ちゃんを世話する人たち（お母さんやお父さん等）が目にするものは何か.「自立的な向こう側」を象徴するもの，その具体物は何か．それは，言うまでもなく,〈顔〉である．

鷲田清一が指摘しているように,「顔」はフランス語で visage，ドイツ語で Gesicht であり，voir や sehen といった，ともに「見る」という動詞から派生した[33]．漢字に目を向ければ，漢字の「顔」も，その旁の「頁」にたしかに「目」が含まれている．要するに,〈顔〉とは、向こう側からこちら側を見ているものなのである．

松沢が述べていることが興味深い[34]．人間の赤ちゃんに顔写真を見せたときの反応を調べる実験がある．正面を向いている顔写真と，視線がこちら側を向いていない顔写真とでは，赤ちゃんはどちらの顔写真をよく見つめるかを調べた実験である．この実験によって，赤ちゃんは，正面を向いている顔写真を好んで見つめ，視線が横にそれているほうは見ないことがわかった．そうだとすると、赤ちゃんには，向こう側にいるお母さんの〈顔〉がこちら側を見ていることがわかり，お母さんの側も，向こう側にいる赤ちゃんの〈顔〉が自分を見ていることがわかる．つまり, 赤ちゃんはこちら側を見つめる〈顔〉に敏感に反応し，お母さんはその赤ちゃんの〈顔〉に反応するのである．この場合，こちら側を見ている〈顔〉が，ひとつの呼びかけだと見なすことができよう．

第 1 章で見たように，呼びかけの原初形態が固有名詞であったことを思い出すべきである．呼びかけが一般名詞ではなく固有名詞とならざるを得ないのは，本来呼びかけとは，交換不可能な自分から交換不可能な他者に対して為されるものだからである．たとえば，鷲田が竹内敏晴を参照しつつ言及していることだが，ある人が別の人に後ろから声をかけると，かけられた人は，その声が自分に向けられたものか，自分の何歩か後ろにいる人に向けられたもの

か，自分の頭を通り越してもっと遠くの人に差し向けられたものかが，相当に正確にわかるらしい[35]．呼びかけられた人は，その呼びかけが自分に向けられたものだと，なぜわかるのか．それは，そもそも呼びかけが代替不可能な人から代替不可能な人に対して向けられるものだからである．呼びかけられた人には，その呼びかけが，他の誰でもない，かけがえのない自分を呼んでいることがわかる．それは，幼き日に「〇〇ちゃん」と固有名詞でもって呼びかけられていたからである[36]．呼びかけが固有名詞に向けられるものだというのは，呼びかけが、かけがえのない存在に対して為されるものだということを含意している[37]．

ところで，よく指摘されることだが，銃殺刑等で銃殺される者が目隠しをされるのは，銃殺される者の恐怖を和らげようとする，銃殺する者の恩情によるのではない．次のことを想像してみるがいい――自分が銃殺される者だとして，その自分が，目隠しごときで銃殺される恐怖が和らぐかどうかを．目隠しをすれば、かえって恐怖は増幅するのではなかろうか．むしろ，目隠しは銃殺する者の恐怖のためである．われわれは，殺される者の目を見ながら，相手を殺すことは原理的にできない．こちら側を見つめる〈顔〉が殺すことの恐怖をこちら側に引き起こすからである．

見ることが相手の恐怖を引き起こす点は、マカクの場合でも同じである．松沢によれば，ニホンザルの場合，目を見ると「キャッ」と言って逃げるか，「ガッ」と言って怒る[38]．サルにとって，「見る」ことは「ガンを飛ばす」という意味しかない．（既に述べたように，チンパンジーの場合は，マカクと異なり，見つめ合うことが頻繁ではないが起こる．）こちら側を見つめる〈顔〉はこちら側に否応なく恐怖をもたらしうるのである．

しかし，〈顔〉が恐怖だけではなく，赤ちゃんとお母さんの見つめ合いのように，情愛をも呼び起こすというのは，人間の場合だけである．そうだとすると，〈顔〉における人間的な特徴がどこにあるのかが，わかってくる．人間の場合には，見ることが敵意を表すのみならず，親密さを表すこと，これである．赤ちゃんは，世話をする周囲の人びとに対して，仰向けに寝ることによって，親愛の情を引き出しているのである．社会学者の大澤真幸は，松沢の研究成果を承けて，次のように述べている．

> 人間は，生きるために，他者（の助け）を必要としているとして，にもかかわらず，その他者からまずは距離をとる．たとえば，マカクやチンパンジーの赤ちゃんは，母親の助けが必要であるがゆえに，母親の身体に密着する．それに対して，人間の赤ちゃんは，マカクやチンパンジーに劣らず母親やその他の他者の助けを必要としているにもかかわらず，仰向けになって，他者から放置されることを甘受，あるいは享受する[39]．

以上述べたきたように，動物とは異なり，距離をとることで，われわれ人間には，他者が出来し，世界が生起するのである．赤ちゃんは，出来した他者に対してどうするのであろう．それは，無防備に自己の裸形を曝すことによって，他者に呼びかける．すなわち，仰向けに寝るのである．そうすることで，他者からの応答を待ち受ける，ということなのである．

おわりに

本稿のねらいは，ブーバーの言う人間存在の原理，「原初的距離」と「関係」についての，現代の比較認知科学の知見による根拠づけにあった．第 1 章では，人間存在が「原初的距離」によってアプリオリに規定されていること，また「関係」はそれぞれ代替不可能な自己と他者の間にある無限の距離が前提となっていることをそれぞれ確認した．第 2 章では，比較認知科学が見出した知見によって，ブーバーの言う人間存在の二重の原理を裏付けた．人間とチンパンジーの決定的な差異は，「仰向け寝」をすることによって他者から距離をとることである．第二に，他者から距離をとることによって見つめ合いや呼びかけが可能となり，ひいては関係が可能となるのである．第 3 章では，見つめ合いや呼びかけの具体物として〈顔〉について考察した．見つめることによって敵意でなく情愛を示すという人間の特異性が明らかにされた．

残された課題がある．本稿は，レヴィナスの〈顔〉について言及しているけれども，レヴィナスの思想について詳細に考察したものではない．ブーバーとレヴィナスの思想的異同はゆるがせにできない問題であり，今後の課題である．

註

[1] Martin Buber, *Werke*, Erster Band, Kösel-Verlag und Verlag Lambert Schneider, 1962, S. 412. 邦訳『マルティン・ブーバー著作集４』，稲葉稔・佐藤吉昭訳，みすず書房，1969 年，7 頁．

[2] Ebenda. なお，定訳はそれぞれ「原離隔」と「関係への参入」であるが，日本語としてのわかりやすさを優先して, 本稿では「原初的距離」と「関係」とした．亀甲カッコの補足には，それらが動詞の名詞化であること，静止した状態ではなく動的なはたらきであることが含意されている．

[3] 吉田敦彦『ブーバー対話論とホリスティック教育――他者・呼びかけ・応答』，勁草書房，170 頁参照.

[4] 本稿註 1 記載の邦訳書における稲葉稔による訳注を参考にした．前掲邦訳書，267 頁参照.

[5] Maurice S. Friedman, *Martin Buber*: *The Life of Dialogue*, The University of Chicago Press, 1955, p. 83. ブーバー研究者のフリードマンはブーバーから直接口頭でこの説明を受けたとのことである.

[6] Buber, a. a. O., S. 412. 邦訳，8 頁.

[7] Ebenda, S. 413. 邦訳，8-9 頁.

[8] Ebenda. 邦訳，9 頁.

[9] Ebenda. 邦訳，同頁.

[10] Ebenda, S. 412. 邦訳，7 頁.

[11] Ebenda, S. 421. 邦訳，21 頁.

[12] Ebenda. 邦訳，22 頁.

[13] なお, ここでは, 人間存在の原理という観点からのみ「関係」について考察し，「我―汝」関係との連関については言及しない．ブーバーの哲学的人間学における「関係」と「我―汝」関係の連関については，たとえばフリードマンが，人間存在の原理である「関係」が「我―汝関係を意味することは明らかである」と述べている．Friedman, *op. cit.*, p. 82. また，吉田は，それが「〈汝〉との「真の出会い」「真の対話」を実現することにほかならない」と述べ, 哲学的人間学における「関係」と「我―汝」とを同一視している．吉田，前掲書，170 頁.

[14] Buber, a. a. O., S. 419. 邦訳，20 頁.

[15] Buber, a. a. O., S. 420. 邦訳，21 頁.

[16] 松沢哲郎『想像するちから――チンパンジーが教えてくれた人間の心』，岩波書店，2011 年，47-48 頁.

[17] 同書，47 頁.

[18] 同書，48 頁.

[19] 同書同頁.

[20] 第一は松沢の指摘による．同書同頁．第二については大澤真幸『動物的／人間的――1．社会の起源』の指摘を参照した．大澤真幸『動物的／人間的――1．社会の起源』，弘文堂，2012 年，127 頁参照.

[21] 松沢，前掲書，51 頁参照.

[22] 松沢，前掲書，47 頁参照.

[23] 松沢，前掲書，57-58 頁.

[24] 松沢，前掲書，51 頁参照.

[25] 上田閑照編著『人間であること』, 燈影社, 2006 年, 8-9 頁.

[26] 松沢，前掲書，53-54 頁参照.

[27] 松沢，前掲書，56 頁.

[28] 引用に関しては，『日本国語大辞典　第二版』（小学館，2000 年）を参照した.

[29] Buber, a. a. O., S. 419. 邦訳，20 頁.

[30] レヴィナス『全体性と無限（上）』, 熊野純彦訳, 岩波文庫, 122 頁.

[31] 同書，163 頁．傍点は同書による.

[32] 同書，80 頁．傍点は同書による.

[33] 鷲田清一『じぶん･この不思議な存在』，講談社現代新書，1996 年，133 頁.

[34] 松沢，前掲書，60-61 頁.

[35] 鷲田　前掲書，138 頁参照．竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』，ちくま文庫，1988 年，148-149 頁参照.

[36] 三好達治の以下の詩を参照．「わが名をよびてたまはれ／いとけなき日のよび名もてわが名をよびてたまはれ／あはれいまひとたびわがいとけなき日の名をよびてたまはれ／風のふく日のとほくよりわが名をよびてたまはれ／庭のかたへに茶の花のさきのこる日の／ちらちらと雪のふる日のとほくよりわが名をよびてたまはれ／よびてたまはれ／わが名をよびてたまはれ」（三好達治「わが名をよびて」，『花筐』所収.）

[37] もっとも，呼びかけているつもりが，呼びかけになっておらず，代替不可能な人に向かっていないような擬似的な呼びかけがある．たとえば，学校の授業でも教師が子どもに届いていない場合が往々にしてあるであろう．この擬似的な呼びかけは，ブーバーの概念で言えば，「すれ違い」(Vergegnung) である．この概念は彼による造語であり，ドイツ語の辞書には載っていない．「出会い」(Begegnung) と欠如を示す接頭辞　ver とを組み合わせたものであり，「人と人の間の真の出会いの欠如」という意味であり，要するに本当には出会っていないということである．ちなみに，「出会い」は既述の gegen に由来し，「自立的な向こう側」と相対するという意味である．『マルティン・ブーバー著作集 2』，みすず書房，1968 年，146 頁.

[38] 松沢，前掲書，1 頁参照.

[39] 大澤，前掲書，132-133 頁．大澤真幸氏の考察から多くの示唆を受けた．「人間は，他者から離れることにおいて，他者に近づくのである．他者を遠ざけることを通じて近づくのだ．〔…引用者による中略…〕人間にとって，他者とは，まず遠ざかるものである．日本語の『あなた』という語が示すように，他者とは『彼方（あなた)』である．しかし, 離れることでますます近づくこと, 近づくことが離れることを前提にしていること，ここに人間の他者との関係の特徴がある.」大澤，前掲書，132 頁.